

# 研究報告



## 歴史から見た戦争の終結——1918年のドイツ帝国——

ホルガー・H・ハーウィック

戦争に勝つだけでは十分ではない。平和を構築することがより重要である。  
アリストテレス

本稿が20世紀におけるドイツの戦争終結のケーススタディであるとすれば、その論点を次のように手短かに要約することができるであろう。二つの世界大戦を開始し、二つの世界大戦に敗北し、二度とも敵国から戦争終結の条件を課された、と。しかし、ここでは第一次世界大戦におけるドイツ帝国のみを取り上げるため、問題はもっと複雑である。何しろ、今ではドイツのみならず英国の歴史修正主義者らも、1914年7月の事態に関わった当事者はみな善意から行動し、罪はないのだとこぞって断言している。誰も戦争を望んでいなかったし、起こりうるとも思っていなかった。しかし、どうしたことか突如として開戦にいたったとき、その責任はヴィルヘルム2世（ドイツ皇帝）からジョージ5世（英国王）まで、テオバルト・フォン・ベートマン＝ホルヴェーク（ドイツ帝国宰相）からサー・エドワード・グレイ（英外相）まで、フランツ・コンラート・フォン・ヘッツェンドルフ（オーストリア帝国参謀総長）からサー・ジョン・フレンチ（英参謀総長）まで、全員に等しくあったと、1920年のデービッド・ロイド・ジョージ（英首相）が今ここにいれば言うであろう。

まず指摘すべき点は、戦争終結は平和創出と同じではないということである。1914年から18年までの間には講和の試みが多数なされた。1915年春に米国のウッドロー・ウィルソン大統領の特使エドワード・M・ハウス大佐の使節団がベルリン、ロンドン、パリへ派遣されたのに始まり、1916年12月にはドイツのフォン・ベートマン＝ホルヴェーク宰相が帝国議会で和平案を提示、ウィルソン大統領は1917年1月に連邦議会上院で「勝利なき平和」演説を行い、1918年1月には下院で「14カ条の平和原則」を発表した。さらに、1917年夏にはオーストリア皇帝カール1世が秘密裏にフランスに講和を提案（「ジクストゥス事件」と呼ばれる）、同年8月にはローマ教皇ベネディクトゥス15世が無併合・無賠償の講和を提言した<sup>1</sup>。しかし、これらはすべて国益と権力政治という強固な壁の前に頓挫した。主要なプレイヤーは誰一人、具体的な講和条件を公言しようとはしなかった。ドイツの場合、こうした

<sup>1</sup> 簡潔な要約については次を参照。“Friedensinitiativen” in *Enzyklopädie Erster Weltkrieg*, ed. Gerhard Hirschfeld, Gerd Krumeich, Irina Renz (Paderborn: Ferdinand Schöningh, 2003), pp. 510-12.

状況から生まれたのが、ボルガ川からマルヌ川までの欧州の支配を主張したパウル・フォン・ヒンデンブルク元帥とエーリヒ・ルーデンドルフ大将を中心とした「タカ派」によるマキシマリスト的な計画や、ドイツが支配する「中欧」と中央アフリカのドイツ植民地帝国を希求したフォン・ベートマン＝ホルヴェーク宰相による1914年のミニマリスト的な「9月綱領」である<sup>2</sup>。ドイツ政府にとっての戦争終結とは、端的に言えば、大規模な併合と賠償を伴う勝者の平和を意味したのである。

では、我々は戦争終結の概念をどう取り扱っているのだろうか。米国海軍大学の標準履修課程「戦略と政策」では、戦争終結を一連の修辭学的な質問によって定義する<sup>3</sup>。すなわち、戦争終結を目指すいずれかの勢力が、戦争継続のコストが達成すべき政治的目標の価値を上回ると合理的に結論づけたか。戦争継続の長期的利益が短期的コストを上回ったか。ある勢力の軍事行動がその勢力の外交を支援したか。そして、軍事指導者が政治指導者からの戦略的指示に留意したか。1914年から18年までのドイツ帝国の場合、これらのすべての質問に「ノー」と答えざるを得ない。そこで回答を迫られる問題は当然ながら、「それはなぜか」である。

最も手近な答えは憲法上の権限の領域にある。戦争終結へのプロセスを主導できたのは誰なのか。1871年4月に制定されたドイツ国憲法ではきわめて明確であった。第11条に、皇帝のみが「他国との条約」の締結と「宣戦の布告および和平の締結」の「職務」を有すると定められているのである。どちらの場合も皇帝の決定に必要なのは、各領邦の代表者から構成され、プロイセンが拒否権を有する連邦参議院（上院）の「同意」と、皇帝が任命する「帝国宰相の連署」のみであった。下院に当たる帝国議会には、予算を承認または却下する権限しかなかった<sup>4</sup>。つまり、戦争の終結はもっぱら皇帝と宰相の手に委ねられていた。内閣も議会も国民の平和運動も、それをもたらし得なかったのである。

参謀総長でさえ、戦争と平和の問題に関して公式な役割を果たすことはできなかった。参謀総長の職務は1871年憲法で正式に規定されていない。軍事上の問題についてのプロイセン国王（および1914年8月の時点ではドイツ皇帝）の「第一の助言者」でしかなく、予算線も部隊編成も意のままにできなかった。参謀総長が国の政策を決定できないことが露呈したのは、1914年11月のことである。マルヌ会戦に敗れ、その後のアルトワとフランドルでの軍事行動も不調に終わった後、参謀総長のエーリヒ・フォン・ファルケンハインは単

<sup>2</sup> これが今でも基準である。Fritz Fischer, *Griff nach der Weltmacht. Die Kriegszielpolitik des kaiserlichen Deutschland 1914/18* (Düsseldorf: Droste, 1964).

<sup>3</sup> Strategy and Policy, Joint Professional Military Education, Phase II Senior Level Course Syllabus 2015, pp. 15-16. Accessed on 7 July 2015 at: [www.usnwc.edu/Departments--Colleges/Strategy-and-Policy.aspx](http://www.usnwc.edu/Departments--Colleges/Strategy-and-Policy.aspx).

<sup>4</sup> Walter Farleigh Dodd, *Modern Constitutions: A Collection of the Fundamental Laws of Twenty-Two of the Most Important Countries of the World* (Chicago: University of Chicago Press, 1909), vol. 1, pp. 330-31.

独講和を模索するよう宰相に進言した。フォン・ベートマン＝ホルヴェーク宰相宛てに「妥当な講和にいたり得るところまでロシア、フランス、英国を打倒することは不可能でしょう」とファルケンハインは書き送っている。軍事的惨事を避け、「自らを徐々に消耗させる危険」（すなわち消耗戦）から逃れる唯一の方法は、ロシアとの講和を模索することだとしたのである<sup>5</sup>。あり得ない処からの賢明な助言であった。しかし、宰相はこの進言を退け、戦争の諸目的のために最後の最後まで戦うと宣言した。

軍隊が消耗して敗北する前に戦争終結を真剣に考えることを拒絶した背景には、国内の問題もあった。戦争はそれ自体の力学を生み出す。1914年8月以降に、フランツ・フェルディナンド大公や大公妃ゾフィー・ホテク、あるいはサラエボのことを思い出したり、ましてや気にかけての人などいるだろうか。世事から隔絶された前線では、無数の若者たちが自分の家族や仕事や社会の将来を気にかけていた。銃後で苦しみにあえぐ無数の女性たちも同じだった。犠牲者の数が増えるほど、政府と軍部は勝利に終わるまで戦い続けるとますます声高に主張した。何がどうあれ、これほど多くの命を無駄にしてはならないというわけである。1917年初め、有力紙『ベルリナー・ターゲブラット』の編集長テオドール・ヴォルフは、駐米ドイツ帝国大使のヨハン・ハインリヒ・フォン・ベルンシュトルフ伯爵との対談の中で、戦場での勝利とエリート支配層による国内統治との関係について、「兵士たちが前線から戻ってくれば、このような反動的なやり方で統治することはできなくなるだろう」と語った。電機メーカ AEG 社総裁でプロイセン軍事省内に戦時原料局を設置したヴァルター・ラーテナウは1917年7月、戦後の国内不安を防ぐには下層階級の賃金を大幅に50%引き上げる必要があるとルーデンドルフ大将に警告し、「生活水準が低下した状態では前線[での戦争]の経費を拠出できない」と述べた。巨大軍事企業クルップ社の取締役で、戦争目的の問題については「タカ派」の代表格だったアルフレート・フーゲンベルクも同様に、前線から戻ってくる男たちは「権力意識が非常に高まっている」はずだと注意を促した。さらに仲間の企業家に対し、戦争の諸目的と国内の平穏との関係を明確に提示した。「したがって国内の困難を避けるには、国民の関心をそらし、ドイツの領土拡張に関する幻想が作用する余地を与えるのが賢明であろう<sup>6</sup>。」領土拡張は、ドイツ帝国にとって国民の不満や反発をそらす手段となるはずだった。ホーエンツォレルン王朝が存続する限り、戦争終結はこの観点でしか考えられなかったのである。

ドイツ帝国の勝利によって戦争が終結していれば、それがどのようなものであったかは

<sup>5</sup> Holger Afflerbach, *Falkenhayn: Politisches Denken und Handeln im Kaiserreich* (Munich: Oldenbourg, 1994), pp. 198-203.

<sup>6</sup> 引用はすべて次の文献から。Holger H. Herwig, *The First World War: Germany and Austria-Hungary 1914-1918* (London: Bloomsbury, 2014), p. 308.

はっきりしている。ウラジミール・レーニン率いる新たなボルシェビキ政権との間で1918年3月に締結されたブレスト＝リトフスク条約では、フィンランド、ウクライナ、リトアニア、エストニア、クールランド、リボニア、ポーランドと、ロシアの産業の50% および人口の30% に対する事実上の支配権がドイツに与えられた<sup>7</sup>。その2ヵ月後のブカレスト条約では、ドイツとオーストリアがルーマニアの油田を手中に収め、ルーマニアは国軍の3分の1を動員解除、ベッサラビアは付庸国に格下げされた<sup>8</sup>。1914年9月以来のドイツの主たる戦争目的であった「中欧」の経済的覇権は、このようにしてほぼ実現されたのである。仮に西部戦線でドイツの戦勝による講和が成立していれば、それは同様に苛酷なものとなり、スカンジナビア諸国は好意的な従属国となり、ベルギーとオランダは付庸国扱いにされ、フランスは分割されて、英仏海峡沿いの港はドイツの手に落ちていたことだろう。

\*                     \*                     \*

ドイツ帝国はその国策の目標を達成する——あるいは、カール・フォン・クラウゼヴィッツの言葉を借りれば、「敵に我々の意志を強要する<sup>9</sup>」——ために、1914年から17年までの間に5度にわたって勝利への「賭け」を試みた。1914年9月のシュリーフェン＝モルトケ・プランの修正、1914年10月から翌11月にかけてのアルトワとフランドルでの(呼称は不適切だが)「海への競争」、1915年5月の東部戦線でのゴルリッツ＝タルノフ攻勢、1916年の西部戦線ヴェルダンでの「肉挽き機」と呼ばれた激戦、そして1917年2月の無制限潜水艦戦の再開である<sup>10</sup>。いずれの試みも、ドイツの公式戦史 (*Der Weltkrieg 1914 bis 1918*) にいう「平凡な勝利」をもたらしたはしたが、協商国(連合国)側に講和を申し出させることはできなかった。それどころか、1917年後半になっても崩壊した交戦国はなく、資源が尽きた国も、心理的あるいは物質的に破壊された国もなかった。

では、次にどうするのか。ドイツ帝国の6度目の勝利——そして戦争終結——への賭けは、国の大戦略ではなく、むしろ作戦技術の抜本的な見直しの場となった。ドイツの軍事史学者ゲルハルト・グロスの辛辣な言葉によれば、側面・包囲作戦は「紙の上と、ヒンデンプルクとルーデンドルフに近い一部の参謀の頭の中にしか」存在していなかった<sup>11</sup>。1917年には

<sup>7</sup> Fischer, *Griff nach der Weltmacht*, pp. 523 ff.

<sup>8</sup> Winfried Baumgart, *Deutsche Ostpolitik 1918. Von Brest-Litowsk bis zum Ende des Ersten Weltkrieges* (Vienna and Munich: R. Oldenbourg, 1966), pp. 132 ff.

<sup>9</sup> Carl von Clausewitz, *On War*, eds. Michael Howard and Peter Paret (Princeton: Princeton University Press, 1976), p. 75. 傍点による強調は原文に基づく。

<sup>10</sup> 次を参照。Colin S. Gray, *The Leverage of Sea Power: The Strategic Advantage of Navies in War* (New York: The Free Press, 1992), pp. 193-98.

<sup>11</sup> Gerhard Groß, *Mythos und Wirklichkeit. Geschichte des operativen Denkens im deutschen Heer von Moltke d.Ä. bis Heusinger* (Paderborn: Ferdinand Schöningh, 2012), p. 124.

すでに挫折していたのである。同年末までのドイツ軍の累積戦死者数は、127万人にも達していた。これに比して、日本軍の総戦死者数はわずか約700人であった<sup>12</sup>。1918年初頭にはドイツ北部の工業都市を産業ストライキの波が襲い、約400万人の市民が通りを埋め、食糧の欠乏と配給制度、戦時不当利得に抗議の声をあげた。

エーリヒ・ルーデンドルフと参謀らは、不可能を可能にしようと決断した。機関銃や火炎放射器、曲射砲、ガス、航空機、大砲を中心に据えた近代産業戦争を前にしながら、強行突破に訴えようとしたのである。だが、どうやって実行するのか。アルフレート・フォン・シュリーフェンは、「突破 (Durchbruch)」という用語を作戦研究から事実上排除していた。その後継者であるヘルムート・フォン・モルトケ (小モルトケ) も、1912年と13年に机上作戦演習で面白半分に突破作戦を試してみたことしかなかった。

しかし、ドイツ軍にとって最大の敵は時間だった。兵力も装備もはるかに上回り、決然と敵対してくる連合軍を前にして、消耗戦はドイツの切り札ではあり得なかった。しかも、1917年4月には米国が連合軍として協商国側について参戦していた。それでもヒンデンブルク参謀総長とルーデンドルフ次長の二頭体制は、1914年11月に講和を進言した前任のファルケンハインとは異なり、外交交渉による戦争終結を断固拒否した。二人は全面的な「勝利による講和 (Siegfrieden)」にすべてを賭けたのである。必要なのは西部戦線の敵陣に「穴を開ける」ことだけで、「あとはなるようになる」とルーデンドルフは主張した<sup>13</sup>。そして、戦争終結の拠り所は拡張主義的な戦争目的にあることに一片の疑いも持っていなかった。ミヒャエル作戦の実行まであと数日という日に、良識ある数人の参謀が突破作戦の有効性に疑問を呈したとき、職名を第一主計総監と改めていたルーデンドルフは、「私にどうしろと言うんだ。今になって、何を犠牲にしても講和を結べというのか」と素っ気なくはねつけたという<sup>14</sup>。

実際、1918年には「講和を結ぶ」ことが大きな問題となった。同年2月のミヒャエル作戦による大攻勢は、ほぼすべての軍団、軍、軍集団の指揮官の目から見て帝国の「最後の切り札」であり、米軍部隊が大挙して欧州に到着する前の最後の賭けであった。攻勢は同年4月5日まで続き、死傷者数30万3450人という甚大な犠牲を伴うことになった。さらに、ルーデンドルフ大将は征服地への欲から、東部戦線に約100万人の占領部隊を残していた。ここにいたって、最前線の上級指揮官らが、配下の部隊が崩壊する前に戦争を終結させる

<sup>12</sup> 青島の戦いで兵士408人と水兵約50人が戦死、141人が病死、地中海戦域で水兵78人が死亡。数値は防衛研究所 (NIDS) の立川京一氏より提供いただいた。

<sup>13</sup> Kronprinz Rupprecht von Bayern, *Mein Kriegstagebuch*, ed. Eugen von Frauenholz (Munich: Deutscher National Verlag, 1923), vol. 2, p. 372.

<sup>14</sup> Albrecht Thaer, *Generalstabsdienst an der Front und in der O.H.L. Aus Briefen und Tagebuchaufzeichnungen*, ed. Siegfried A. Kaehler (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1958), pp. 196-97.

よう進言し始めた。1918年6月までには第6軍司令官のバイエルン王太子ループレヒトと第3軍司令官のカール・フォン・アイネム将軍が、兵士たちは空腹のあまり、ここぞというときに攻撃の歩を進めようとしなことが度々あり、その代わりに「置き去りにされた」連合国の備蓄食糧を見つけては貪り食っていると報告していた。規律違反や脱走も急増していた。ルーデンドルフが「敗走する」英国軍をインドまで追撃するという非現実的な夢にふけている間に、ループレヒト王太子は参謀本部に、前線に召集された予備兵の2割もが出頭しなかったと報告した<sup>15</sup>。ルーデンドルフが「責任逃れ」「怠け者」と呼んだこのような兵役忌避者の数は、戦争末期の2カ月間で76万～100万人にのぼったとドイツの軍事史学者ヴィルヘルム・ダイストは推計している<sup>16</sup>。一方、出頭した者は、百戦錬磨の古参兵から「スト破り」との罵声を浴びた。みすぼらしい身なりでろくな武器も持たない栄養不良の兵士と痩せ細った馬ばかりの弱々しい師団では、食糧も装備も充実した連合国の軍隊に適うはずもなかった。

またしても、ではどうするのか、という疑問が浮上する。しかし、ここでもルーデンドルフには答えがあった。10月1日、ルーデンドルフは参謀らに「戦争の遂行は無意味だった」と告げる。だが、兵士たちや国や君主のことはほとんど眼中になく、彼の主たる懸念は軍隊に向けられていた。軍の壊滅を防ぐには、戦争の「迅速な終結」しかないと主張し、皇帝と宰相に「一切の躊躇なく休戦を求める」よう要求した。「勝利による講和」はなく、併合も賠償も一切ない、降伏による戦争終結であった。しかし、皮肉なことに、それと同時にルーデンドルフは、1914年以来の戦争を開始し遂行してきた政治家と軍人が大量殺戮の責任を逃れられる方策も提案した。皇帝が戦争終結を「かような状況にいたったことについて我々が大いに感謝すべき集団」、すなわち自由党と社会民主党に任せることを認め、「今や彼ら自身が自ら招いた混乱に始末をつけるがいい」と言い放った<sup>17</sup>。ルーデンドルフはウィルソン大統領の有名な「14カ条の平和原則」を受け入れることも要求した。それを読んだこともなかったにもかかわらず。そして、変装してスウェーデンに亡命し、回顧録を執筆したのである。

際立って衝撃的な戦争終結の事例であった。会議に出席していた参謀の中で、このとき

<sup>15</sup> Crown Prince Rupprecht, *Mein Kriegstagebuch*, vol. 2, p. 304. 1918年6月5日の記述。

<sup>16</sup> 次の秀逸な分析を参照。Wilhelm Deist, "Verdeckter Militärstreik im Kriegsjahr 1918," in *Der Krieg des kleinen Mannes. Eine Militärgeschichte von unten*, ed. Wolfram Wette (Munich and Zurich: Piper, 1992), pp. 146-67.

<sup>17</sup> Thayer, *Generalstabsdienst an der Front*, pp. 234-35; Wilhelm Ritter von Leeb, *Tagebuchaufzeichnungen und Lagebeurteilungen aus zwei Weltkriegen*, ed. Georg Meyer (Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, 1976), p. 140. 傍点による強調は原文に基づく。次も参照。Scott Stephenson, *The Final Battle: Soldiers of the Western Front and the German Revolution of 1918* (New York: Cambridge University Press, 2009).

のルーデンドルフの言動が、のちにワイマール共和国に終始つきまとうことになる悪名高き「背後からの一刺し（Dolchstoß）」伝説の下地を作ったことに気づいた者はほとんどいなかった。1919年後半、帝国議会の特別調査委員会に出席したフォン・ヒンデンブルク元帥は、1917年1月に無制限潜水艦戦を再開した正確な時期について証言するはずが、ドイツ軍は1918年に銃後の者たち（ユダヤ人、マルクス主義者、平和主義者、社会主義者）に「背後から一刺し」されたのだと宣誓下で証言した<sup>18</sup>。ルーデンドルフとヒンデンブルクの一見正当に見えるが極めて不正確な発言が、ワイマール共和国の最終的な消滅への道筋をつける一助となったのは確かである。

実際には、ドイツはまるで溺れる者が縄をつかむように、ウィルソン大統領の「勝利なき平和」の原則と「14カ条の平和原則」にしがみついた。ジョルジュ・クレマンソー（仏首相）やデービッド・ロイド・ジョージ（英首相）のような欧州の古強者からは寛大な扱いを期待できないことはわかっていた。そこで、米国の偉大なる理想主義者を頼りにしたのである。事実、10月8日付のウィルソンからの最初の覚書は如才なく丁重で、ドイツ帝国が「14カ条の平和原則」をその後の交渉の基礎として、秘密外交の廃止、海洋の自由、貿易障壁の撤廃、軍備の縮小、当事者である住民による植民地問題の解決といった5つの現実味のない哲学的な原則も含めて、すべてを受け入れるかどうかの確認を求めるだけのものだった<sup>19</sup>。参謀本部は、「14カ条の平和原則」を受け入れればウクライナとアルザス地方を保持できると確信した。一方、外務省はこれらの原則によって帝国は講和締結後に海外植民地を奪還できると考え、ベルギーの独立回復やアルザス＝ロレーヌ地方のフランスへの割譲、オーストリア＝ハンガリー帝国下の諸民族の自決、海への通路を保証されたポーランドの独立の承認といった他の原則は無視することにした。ところが、10月14日付の「率直かつ直接的」な2通目の覚書は、ドイツ政府の楽観的な期待に冷や水を浴びせた。ウィルソンはドイツの「不法で非人道的な」潜水艦戦と、フランドルと北フランスでの「残虐で非道な破壊」を非難したうえ、ドイツ政府に「戦場における米国軍および連合国軍の現状の軍事的優位性」を公式に認めるよう求めたのである<sup>20</sup>。さらに、10月23日付の3通目の覚書では、「ドイツの軍指導部や君主制支配層」に対し、戦争終結を「降伏」の一語で明示した<sup>21</sup>。容赦のない「現実政治」であった。

ドイツは何とかウィルソンをなだめようと、土壇場で半専制的立憲体制の改革に着手した。

<sup>18</sup> Paul von Hindenburg, *Aus meinem Leben* (Leipzig: S. Hirzel, 1920), p. 403.

<sup>19</sup> *The Papers of Woodrow Wilson*, ed. Arthur S. Link (Princeton: Princeton University Press, 1985), vol. 51, pp. 263-64. "A Draft Note to the German Government," 8 October 1918.

<sup>20</sup> *Ibid.*, vol. 51, pp. 333-34. "A Draft of a Note to the German Government," 14 October 1918.

<sup>21</sup> *Ibid.*, vol. 51, pp. 417-19. "To Germany," 23 October 1918.

新宰相のバーデン大公マクシミリアンは外相のパウル・フォン・ヒンツェ提督の補佐を受け、プロイセンの複雑な三級選挙法を廃止し、閣僚が帝国議会に対して責任を負うようにし、皇帝の陸海軍統帥権と事実上の外交権を無効にした。だが、それではあまりに不十分で、しかも遅きに失したのである。

\* \* \*

このドイツの事例で戦争終結をもたらしたのは、実のところマクシミリアン公とその内閣でも、新たに「責任」を負った議会でもなく、敗北した軍隊である。戦争終結を余儀なくされる駄目を押したのは、大洋艦隊であった。1918年10月下旬、ドイツ帝国海軍司令長官のラインハルト・シェア提督と艦隊司令官のフランツ・フォン・ヒッパー提督は、作戦計画第19号を立案する。大洋艦隊の「名誉」と「将来の再生」のため、英国海軍の大艦隊とその援軍の米国の超弩級戦艦5隻に捨て身の攻勢を仕掛ける作戦であった。「決死行」の計画を耳にした水兵らは、10月29日、各艦のボイラーの火を消し、弩級戦艦の「ケーニヒ」、「クロンプリンツ・ヴィルヘルム」、そして、「マルクグラフ」に反乱の赤旗を掲げた。海軍の他の部隊も即座に加わり、水兵らはキール軍港から鉄道伝いにハンブルク、ブレーメン、クックスハーフェン、ヴィルヘルムスハーフェンへと革命をもたらし、そこから内陸のベルリン、ドレスデン、ミュンヘンへも反乱が広がった。水兵らの第一の要求は、戦争の終結であった<sup>22</sup>。

陸軍でも状況は明るくなかった。ルーデンドルフの後任として第一主計総監に就いたヴィルヘルム・グレーナー将軍は、陸軍がまさにこのとき崩壊しつつあることを参謀らに再認識させた。「行方不明」か脱走した兵士は20万～100万人にのぼり、11月初めには、戦闘態勢にあるわずか10師団余りだけでベルギー海峡からライン川上流までの国境を守っていた。1918年11月9日、グレーナーは野戦軍の上級指揮官らに、兵士たちには前線なり国内なりで戦う意欲がまだ残っていると思うかと尋ねた。会議に集まった39人の指揮官のうち、兵士たちは衷心から皇帝を支持していると答えたのは一人だけだった。大半は、「部隊は完全に疲弊している……目の前にあるのは[軍隊の]残骸だけだ」と断言した。ドイツ南部出身のグレーナーに残された道は、プロイセン国王に陸軍は「もはや陛下の味方ではありません」と告げることだけだった<sup>23</sup>。ヴィルヘルム2世は、前線で連隊を率いて「名誉ある」死を遂げるか、北海南域で大洋艦隊の「決死行」を率いてはどうかとの進言を拒絶し、密かにオラ

<sup>22</sup> 次を参照。Michael Epkenhans, "Red Sailors' and the Demise of the German Empire, 1918," in *Naval Mutinies of the Twentieth Century: An International Perspective*, eds. Christopher M. Bell and Bruce A. Elleman (London and Portland: Frank Cass, 2003), pp. 80 ff.

<sup>23</sup> Oberkommando des Heeres, *Der Weltkrieg 1914 bis 1918*, 14: *Die Kriegführung an der Westfront im Jahre 1918* (Berlin: E.S. Mittler, 1944), p. 716.

ングとの国境を越えて亡命した。11月9日、社会民主党（SPD）のフィリップ・シャイデマンは、帝国議会のバルコニーからドイツ共和国の誕生を造作なく宣言した。こうして、ブランデンブルク選帝侯領からプロイセン公国、ドイツ帝国まで504年にわたったホーエンツォレルン家の支配は終焉を迎えた。

ひねった見方をすれば、戦争終結はドイツ側の望む通りにもたらされたとも言える。ドイツは1918年2月に運頼みの賭けに出て敗れていた。軍はベルギー、ポーランド、バルト諸国、ウクライナ、ルーマニア、さらにカスピ海までのロシアを占領したものの、重い足取りで西へ帰還する兵士たちは、ある無名の退役兵の言葉を借りれば、「罵倒され、名誉を奪われ、侮辱され、軽蔑された」心持ちだったという<sup>24</sup>。「国王と祖国」のために戦い続けたいと思う者はほとんどいなかった。

1919年6月28日、フリードリヒ・エーベルト大統領率いる社会主義者の政権は、屈辱的な440カ条からなるベルサイユ条約を受け入れた。シャイデマン首相は締結を拒否していたが、受け入れなければ戦争を再開すると迫られたドイツは、ヘルマン・ミュラー外相とハンス・ベル運輸相をパリに派遣し、条約に調印させた。フランスのジョルジュ・クレマンソー首相の言葉の通り、「1914年の事態に関わった者」は「すべてを清算するとき」には誰一人パリに来なかった。フォン・ベートマン＝ホルヴェーク宰相の顧問だったクルト・リーツラーは、国の行く末を次のように要約した。「100年間の隷属。世界の大国の夢は永久に消滅。あらゆる傲慢の終焉。ドイツ人は世界中に離散。ユダヤ人と同じ運命<sup>25</sup>。」ドイツの高官の多くにとって、戦争終結は連合側側の新たな要求によって極めて厳しいものになった。最高軍司令官のヴィルヘルム2世から潜水艦の指揮を執った多数の下級将校までを含む1,590人の「戦犯」容疑者の引き渡しを求められたのである（ベルサイユ条約第228～第230条に規定<sup>26</sup>）。ドイツ連邦共和国は、ベルサイユ条約の条項に基づく最後の賠償金の支払いを2010年10月によく終えた。

実のところ、この講和は勝者側にとっても戦争そのものと同様に納得しがたいものになった。中国の偉大な軍事思想家である孫子は、戦争終結の過程を軍隊の展開と同じように、常山の蛇になぞらえて巧みに表現している。「首を打たれれば尾が助け、尾を打たれれば首が助け、胴を打たれれば首と尾が助ける<sup>27</sup>。」まさにその「蛇」が、1933年1月30日に首

<sup>24</sup> *Der Krieg des kleinen Mannes*, p. 120から再引用。

<sup>25</sup> Kurt Riezler, *Tagebücher, Aufsätze, Dokumente*, ed. Karl Dietrich Erdmann (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1972), p. 480. 1918年10月1日の記述。講和の「交渉」については次を参照。Margaret MacMillan, *Paris 1919: Six Months that Changed the World* (New York: Random House, 2001).

<sup>26</sup> 次を参照。John Horne and Alan Kramer, *German Atrocities, 1914: A History of Denial* (New Haven and London: Yale University Press, 2001), pp. 329 ff.

<sup>27</sup> Sun Tzu, *The Art of War*, tr. Ralph D. Sawyer (Boulder, CO: Westview, 1994), p. 221.

相に任命されたのである。

当時、極めて苛酷に見えたドイツの戦争終結は、やはりレーニン流の急進的な革命にはつながらなかった。軍幹部も外交団も、官僚も司法関係者も粛清されることはなかった。ヴァルター・ラーテナウは「偶然の革命」という表現を用い、戦争終結をミヒャエル作戦後の軍の崩壊と関連づけ、「ドイツ革命はいわば敗軍のゼネストである」と述べた<sup>28</sup>。著名な神学者エルンスト・トレルチはベルリンの「革命」気運を、「どの顔からも『これからも給料はもらえる!』と読み取れた」と遠回しな言葉で捉えている<sup>29</sup>。戦争が終結したのは開戦から1586日目であった。

長年にわたって続き、国の財政を枯渇させ、社会構造を崩壊させ、軍隊を極限まで酷使した戦争を終結させるという多大な困難を経験した大国は、当然ながら1918年のドイツ帝国が初めてではない。それより2千年以上前に、古代ギリシャの歴史家トゥキディデスは、戦争によってかき立てられる激情と、国政に理性を取り戻すことの困難さを指摘している。ペロポネソス戦争の7年目にアテナイがピュロスの戦いで勝利したのち、スパルタの使節はアテナイ側に古代ギリシャ世界の平和を回復させようと訴えた。

[先の勝利によって] 運が常にあなた方の側にあると思込まれてはなりません。分別ある人間は、勝利を当てにならないものとみなすだけの慎重さを持ち合わせています。また同様に、逆境においても冷静さを失わず、戦争とは軍人が封じ込めておきたいと思う範囲内にとどまることはなく、偶然の処方に従って進展するものと考えerのです<sup>30</sup>。

悲しいかな、1917年から翌18年にかけての時期に、ドイツ政府にトゥキディデスのような人物は現れなかったのである。

---

<sup>28</sup> Walther Rathenau, *Kritik der dreifachen Revolution* (Berlin: S. Fischer, 1919), p. 9.

<sup>29</sup> Christian Graf von Krockow, *Die Deutschen in ihrem Jahrhundert 1890-1990* (Reinbeck bei Hamburg: Rowohlt, 1990), p. 123から再引用。

<sup>30</sup> Thucydides, *The History of the Peloponnesian War* (Oxford: Oxford University Press, 1960), pp. 206-07.